2 月 13 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　4：　1－9

「聞く耳のある者は聞きなさい」

「神の国の秘密」はいつも私たちがわかるように語られています。これは確かな事実です。しかし、そうであるならばなお、同時にこうも思うのです。「わかるように語られているはずの言葉が、どうしてわからなくなってしまうのだろう」と。「ちゃんと聞いているはずなのに、なぜわからないのだろう」と。これまで数多の信仰の先達たちが、何度も聞いてきた言葉です。自分自身も何度も、何度も聞いてきた言葉です。いや、何度も聞いてきたはずでした。蒔かれたはずのあの種はどこに行ってしまったのでしょう。

そのように思う私たちの耳に、イエスのたとえは辛辣な響きを持って迫ってきます。「蒔いている間に」「鳥が来て食べてしまった」(マルコによる福音書 4:4)、「根がないために枯れてしまった」(マルコによる福音書 4:6)、「茨の中に落ち、実を結ばなかった」(マルコによる福音書 4:7)。

どれも自分のことを言われているようです。わざわざイエスに教えてもらう、解説してもらうまでもありません(「また、イエスは言われた。『このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。』……」マルコによる福音書 4:13 以下)。やはり自分にはわかるはずのないことだったのではないか。そう思えてきます。自分の限界は自分でわかっているつもりです。イエスを十字架につけた支配者や群衆たちと同様、私にはわかるはずもなかったのだ、と(「この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」コリントの信徒への手紙一 2:8)。

しかし、イエスは私たちに御言葉を語り続けることを諦められません(「『目が見もせず、耳が聞きもせず、／人の心に思い浮かびもしなかったことを、／神は御自分を愛する者たちに準備された』と書いてあるとおりです。」コリントの信徒への手紙一 2:9)。自分では痛いほどわかりきっている事柄です。自分ならとっくに諦めているであろうにもかかわらず、何度も、安堵でも「聞く耳のある者は聞きなさい」(マルコによる福音書 4:9)と耳を傾ける時を待っておられます。つい、自分の判断や、自分で出した結論を優先しようとする私たちに、「神の言葉を聞く」ことの大切さを繰り返し教えてくださるのです。

なぜなら、神の言葉を聞き、知恵に耳を傾けることこそ、本当に神と出会うための第一歩だからです(「……知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら……あなたは主を畏れることを悟り／神を知ることに到達するであろう。」箴言 2:1-5)。何がどうあろうともとにかく「聞く」こと。そこからしか、神と人間の関係は始まらないのです。

だから、イエスは御言葉の種を蒔くことを諦められません。時に笑顔で、時に涙に暮れながら(「涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。」詩編 126:5)、しかし、必ず豊かな実を結ぶと信じて蒔き続けられているのです(「また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」マルコによる福音書 4:8)。

自分がどのような土地かと勝手に診断して一喜一憂している時間があるならば、「聞くことのできていない」自分に気づかされたのだと感謝して、改めて「聞く」者となりましょう。常に完全でいられるはずもありません。だから私たちにはイエスが教えてくださる一つひとつの言葉が大切なのです。

今日もイエスの言葉が聞こえてきます。「聞く耳のある者は聞きなさい」。